

[学 会]

東京女子医科大学学会 第133回例会

日 時 昭和40年6月25日(金) 午後2時より
場 所 東京女子医科大学 本部講堂

1. 東京都豊島長崎地区における老人血圧の調査について

(衛生) 小野 恵

東京都豊島長崎地区に住む、60才以上の老人 290名(男 129名, 女 161名)に問診, 視診, 理学的診察, 尿中タンパク・糖検査, 血圧測定をおこなった。

1) 平均年齢・男 72.81才, 女 71.85才の, 被検者の平均血圧値は, 男最大値 161.4mmHg, 最小値88.4mmHg, 女最大値 161.4mmHg, 最小値89.7mmHgであり, 有意の性差はみられない。

2) 年齢10才階級別の比較では, 60才以上を対象とする本報では, 最大血圧および最小血圧のいずれにも, 加齢による血圧増加の傾向はみられず, 女60才代の最小血圧は70才以上の群よりも有意に高かった。

3) 最大血圧 150mmHg, 最小血圧90mmHg以上を高血圧とした場合, 年齢階級別被検者総数に対する高血圧者の割合は, 高齢者群の方がむしろ少ない傾向を示した。

4) 栄養良好者と不良者との比較では, 両群に有意差はない。

5) 尿中タンパク陽性者群の最小血圧平均値は, 陰性者のそれより高かった。

6) 高血圧症候群は男28.7%, 女36.0%, 無自覚症候群は男38.8%, 女33.5%であった。

2. アディー症候群の1例

(眼科) 小林久美子

私は最近アディー症候群不全型と思われる1症例を経験したので報告する。

症例は22才, 無職の女子。主訴は両眼の流涙と霧視。全身所見は膝蓋腱反射およびアキレス腱反射共に正常で特記すべき事はない。

眼所見としては瞳孔左右不同あり, 両側とも対光反応, 近見反応は欠如しているが, 暗室に放置すると瞳孔は徐々に散大し, 光をあてると徐々に縮腫した。ピロカ

ルピン点眼により著明な縮腫がおこり, メコリール点眼では正常人と異なり, やはり著明な縮腫が認められた。血液ワ氏反応は陰性であった。以上, アディー症候群の不全型と思われる症例について報告し, 併せて文献的考察を行なった。

3. 食道発声時に拡張食道によつて気管狭窄を起こす症例

(耳鼻科) 丸岡 修三

われわれは喉頭痛にて喉頭全摘出術を受けた64才の男子で, 食道発声法習得後, 2年間なんら障害なく過して来た食道発声熟練者において, 発声時に強度の呼吸困難を訴える症例に遭遇した。

X線により気管, 食道の相互関係を観察した結果, 発声時に拡張された食道により気管が圧迫されて狭窄を起こす事がわかった。

この原因については, 長期間の食道発声と体質的因子も加わり, 気管軟骨および膜性壁が軟化したものであると思われる。

食道発声による副作用について, ほとんど報告を見ないが, 最近珍しい症例を経験したので報告した。

4. 大動脈弓異常を伴った稀な心奇型の2例

(小児科) 山崎香栄子・○大塚貞子

先天性心疾患で, 乳児期に重篤な症状を示すものには種々の心奇型を伴うものが多いが, 最近われわれは大動脈弓異常を伴う稀な心奇型の2例を経験したので報告した。第1例は1年4カ月の男児で, 呼吸困難とチアノーゼを主訴として来院し, 心拡大と, EKGで完全房室ブロックを呈し, Levine II度の短い収縮期雑音を聴取し, 心不全強く, 入院2日目に死亡した。剖検により修正大血管転位, 心室中隔欠損に加うるに大動脈弓分離を伴った稀な例であった。第2例は1カ月男児で, 呼吸困難, チアノーゼ, 嘔吐があり, 逆行性大動脈撮影, EKG, X-Pで大動脈絞窄と心室中隔欠損と診断, 緊急手

術を行なったがすぐ死亡した。剖検により Taussig Bing 症候群に postductal の大動脈絞窄と動脈管開存を合併した例であった。

5. [症例検討会]

脳神経症状を伴った心筋梗塞の1例

司会 広沢弘七郎教授

追って全文を掲載する。

6. 東京女子医科大学外科教室における過去10年間の 高齢者急性腹部症に関する統計的観察

(外科) 太田八重子・倉光秀磨・野口尚子・

山本 勲・新井克志・細井義男

近年、術前術中術後管理の進歩は、人口老化に伴い高令者の外科的処置に大きな発展をもたらした。しかし術前検査および管理が充分に行なわれ得ない高令者の急性腹部症に関しては、まだ多くの問題があると思われる。そこでわれわれは外科教室で過去10年間に経験した高令者の急性腹部症例について検討を行ない、また死亡例についてはその原因と対策を考案し、今後の外科的向上を期待し、その結果を報告する。

東京女子医大外科教室における昭和30年4月より昭和40年3月迄の10年間の全手術症例数は(心臓、形成、小児、脳外科を除き)7333例であった。そのうち60才以上の手術症例は597例で、全症例の6.4%、急性腹部症は85例であった。これは全症例の1.2%、高令者症例の14.2%にあたる。

これは他病院の統計値とほぼ一致している。また死亡例は85例中12例で、死亡率14.1%であった。疾患別にみると、急性虫垂炎46例、死亡3例6.5%、イレウス16例、死亡2例12.5%、胃十二指腸疾患7例、死亡4例59.1%、胆嚢胆道炎9例、死亡2例22%。急性膵炎1例、嵌頓ヘルニア4例、卵巣嚢腫捻転2例、死亡1例50%であった。死亡例を年齢別に見ると、60才台が48例中10例20.9%、70才台が17例中2例11.8%、80才台は6例中死亡例なしであるが、死亡例に関しては年齢的因子の有意の関与は考えられず、それよりも原疾患とその合併症に関係大であるように思われた。

死亡例の個々の例で検討すると、術前より高度の肝障害、循環器障害、内分泌障害を合併するものは当然死亡率は高く、また潜在性合併症が術中術後直ちに現われ死の転帰をとつた例もある。この場合、急性腹症の診断で即時入院、緊急手術という症例にも可能な限りの術前検査を行なえば、合併症のいくらかは未然に防ぎ得る可能性があつたように思う。また術中術後の管理にも多くの参考となる資料が与えられたであろう。

急性腹部症発症より手術迄の時間的因子は、高令者の

場合若年者と比し予後にかかなり大きな影響を与える。われわれの症例でも、胃十二指腸穿孔で穿孔より24時間以上経過した高令者症例では全例死亡している。

次に手術方法に関して、高令者の場合、手術は可及的に手術侵襲を小さくする考慮は当然だが、われわれの症例についてみると、手術を一次的に行なうか否かは、術前術中術後の管理の進歩により、個々の症例の全身状態、合併症の有無により、術者が判断し決定されるべきものと思う。

以上の如くわれわれの経験した高令者手術症例は少ないので、これだけでその予後良否の判定はできない。しかし、術前術中術後の慎重な管理、手術法の選擇を充分配慮するならば、危険視されがちな高令者の急性腹部症に対し、その安定度は更に高められるであろう。

7. [綜説]

ライ菌の動物移植における2, 3の問題について

(細菌) 須子田キヨ

ライ菌が発見されて以来90年余の年月が経過し、この間、他の多くの細菌その他の病原微生物における発見およびその研究はめざましいものがある。しかるにライ菌のみは未だにその培養も動物移植も成功していないため、一步の進歩もしていない。しかし、この陰には数えきれないくらいの沢山の研究が行なわれて来たのである。動物移植を成功に導びくために、これまでも分析的研究が行なわれて来た。実験動物の種類、接種部、感受性を高める方法など検討された。われわれも、ライ菌の動物移植を試みているが、接種部として Hoden を選び、低体温部であること、Hoden の実質よりその周辺組織によくひろがる点など、未だ研究の途中であるが、充分検討してみるべきである。

次の問題は接種動物として最も利用されやすいマウスについて、接種前、すでに鼠癩菌様の培養不能(小川培地、普通寒天培地使用)の抗酸菌の不顕性感染のある事実である。演者はこの問題を消毒飼育によって解決しようのではないかと思ひ、容器の消毒、飼料や糞の滅菌、動物室の殺菌灯および消毒剤による滅菌消毒など、普通の研究室内で行ないうる最高の消毒飼育を行なつても、普通の清潔な飼育管理を行なつても、両者ともに前記抗酸菌の不顕性感染を防ぐことは不可能である。またマウスを年齢別に観察した結果、新生児はもちろん、妊娠マウスおよびその胎児にも培養不能の抗酸菌が証明された。これらの抗酸菌の一部は次代マウスの継代移植が可能であつた。それ故、マウスをライ菌の動物移植に使用する場合は、この点について十分に注意を拂わなければならないと思う。